

発表 濱田義文の思想形成と展開

菅沢, 龍文 / SUGASAWA, Tatsumi

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

2006-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008210>

濱田義文先生追悼シンポジウム 発表

濱田義文の思想形成と展開

菅沢 龍文

はじめに

「濱田義文の思想形成と展開」というテーマのもとで、委員会から私に与えられた課題は次のようなものである。「濱田先生は『若きカントの思想形成』に集約されるカント批判期前に関する研究から出発され、晩年にはカントの『人間学』へと関心を移された。その研究の展開の過程を発展史的視点から考察してください」と。したがって本稿は『若きカントの思想形成』（勁草書房、一九六七年）にみる研究と思想から始めるのがよいと思われるが、まず濱田先生の研究と思想およびその形成と展開を見るうえで前提となるような時代のことにも簡単に触れることから始める

ことにする。

ところで、他の提題者の皆さんが濱田先生の哲学研究を、日本のカント研究、カント倫理学、イギリス経験論、和辻哲郎との関係で取り上げることになっている。これらのテーマについては他の皆さんと重複する点もあると思われるが、本発表は濱田先生のご研究がカント哲学研究を中心に時間軸に沿ってどのように展開したのか、という点を主にして整理することになる。また、濱田先生の思想という点では、濱田先生にとってはご研究が人生の多くの部分を占めていると考えられ、そういう意味ではご研究の展開に示される濱田先生のご関心の内に、濱田先生の思想の端々を見ていくことにする。

濱田先生のご研究のエポックとなるのは、やはり三つの

カント研究書になると思われる。第一に先に触れた『若きカントの思想形成』であり、第二に『カント倫理学の成立——イギリス道徳哲学およびルソーとの関係——』（勁草書房、一九八一年）であり、第三に『カント哲学の諸相』（法政大学出版局、一九九四年）である。いずれも十数年の間を置いてまとめられたものであり、その間に蓄積されたご研究を踏まえた研究書である。そこで今回は、これら三つの著作を主な手引きとして濱田先生の哲学研究の遍歴を見ることが出来る。

なお、学部での演習ではカントのテキスト以外にヘーゲルの『法哲学綱要』やペイコンの『エッセイズ』の原典講読をされたこともあり、また社会思想や人間論に関する他の思想家たちにも随所で言及された。いただいた表題の「思想形成と展開」ということで言えば、こうした濱田先生のご関心全般を取り上げねばならないと思われる。しかしこれを系統立てて示すのは現在のところは難しいし、幸い今回いただいた課題もそこまで要求されていないので、濱田先生のカント研究の展開過程を発展史的視点から考察することに重点を置き、微力ながらも濱田先生の思想についても考察を加えることにする。

一 一九六〇年代を中心に（『若きカントの思想形成』期）

濱田先生は一九四七年に東京帝国大学法学部政治学科をいったん卒業され、その後同大学文学部哲学科倫理学専攻に入られて一九五〇年に卒業された。こういう点からみると濱田先生には、政治学的関心が最初にあったと言える。もともと、戦時中に濱田先生は弟御の義道氏から、兄貴は倫理的だが自分は宗教的だ、と言われたとのことである（濱田義道『生命ある限り』華書房、一九七七年、「編者あとがき」参照）。また、戦後すぐに手元に見つけた『純粹理性批判』を読まれたという濱田先生の述懐があり、濱田先生をはじめ多くの知識人にとって、敗戦後のいわば一切価値の価値転換のもとで、倫理学や哲学は政治や倫理をはじめとする物事の価値を原理的に深いところから問い直すようになったものと思われる。

濱田先生の哲学のご関心は政治哲学や倫理学を中心とするとはいえ、幅広いものである。熊本時代の一九六二年には雑誌『理想』に「真理の客観性について」という論文を書かれた。この論文では、認識とは人間の実践との関係で「無限の深化拡大の過程」であると論ぜられる。これは認識論の問題を扱って一見したところ濱田先生のご関心からはずれるのではないかと思われる。しかし、この論文で

はアメリカのデューイの考え方も組上に乗せられており、たんにドイツの思想だけではなく英米の思想をも広く視野に入れて考えるという、その後にも一貫する濱田先生の姿勢が見られる。また、一九六四年には「現代におけるマルクス主義哲学の問題」といった文章を雑誌『理想』に書かれたこともある。この論文では、労働が「自然そのものの自己実現」として捉えられている。

さて、濱田先生のご研究というと、生涯にわたって常にカント哲学を中心に置いて哲学研究を続けられたと言える。このことは配布された業績一覧（『哲学年誌』第二十四号の一覧と第三十六号の一覧補遺とにさらに若干追加）にある「論文」を見ると一目瞭然である。その最初の論文が「カント『美と崇高との感情に関する観察』について」（『熊本大学法文論叢』三号、一九五二年、所収）である。このテーマは実に二十九年後の研究書『カント倫理学の成立』にまで繋がっており、濱田先生の息の長い研究姿勢を示すと思われる。

一九六〇年代に濱田先生が著されたカント研究書は『若きカントの思想形成』である。これは一九六七年出版で、濱田先生の熊本時代のご研究が反映されていて、しかも日本における「批判期前カント」に関する最初の系統的・包括的研究（著者「まえがき」参照）になる。その内容を挙げると、若きカントの生い立ちとその時代、一七五〇年代のカントの自然研究や自由意志についての見解、六〇年代に

入ってからのカントによる神の存在証明、人間へのカントの関心の高まりについて論じられている。この人間への関心に見る哲学的テーマには、道徳感情、美と崇高の感情および人間の諸気質、ルソー思想の影響、視靈者スウェーデンボルクおよび形而上学、人間の使命などがある。関連する思想は、ライプニッツ・ヴォルフ哲学とニュートンの自然科学、さらにはイギリスの経験論や道徳感情説、そしてルソーをはじめとするフランスの思想家の諸思想などが幅広く取り上げられる。

なお、濱田先生は本書の「まえがき」で三つの関心について語られる。第一は、「若きカント」を一個の統一的全体として、その人間と思想の全き姿においてとらえることである。第二は、「できるだけ広い思想的関連の究明」である。第三は、「カント・ヒューマニズムの根本精神を明らかにしめること」である。この第三の関心には、さらに「そもそも哲学とは何であり、何でなければならぬかを自分自身の課題として問おう」ということも含まれているとされる。この問いに関しては、本書の最終章「人間の使命」の最終節の表題「知恵の立場」が一つの解答となっている。この立場は学識と知恵とを区別して、知恵の立場に哲学の本来のあり方を求めるという、批判期前のカントが行き着いた地点である。この点は、十二年前の一九五五年に「カント哲学の市民的性格」（日本哲學會『哲学』、所収）です

でに論ぜられており、濱田先生が若きカントの哲学から受けられた重要な示唆ではないかと思われる。また、一九六七年の「人生の意味への問い」や一九六九年の「人間形成としての教養」といった雑誌『理想』の掲載論文へと繋がったとも考えられる。

二 一九七〇年代を中心に『カント倫理学の成立』期

一九七三年に法政大学へ赴任されてから法政大学大学院の濱田ゼミでは、『純粹理性批判』を十年かけて講読された。この成果は『純粹理性批判』出版二百年にあたる一九八一年の成立史的研究「純粹理性批判への道」(雑誌『理想』所収)や、時期的には遅れるが、カントの理性批判の意味についての研究「法廷としての純粹理性批判」(『法政大学文学部紀要』一九八六年、所収)となつて現れる。

これと並行して、第二のカント研究書『カント倫理学の成立』が一九八一年に出版される。これは、一九六九年の日本倫理学会論集『カント』の論文「初期カントとイギリス道徳哲学」や『若きカントの思想形成』の中の人間への関心にかかわる部分の研究をさらに深められたものと考えられる。本書では、ドイツにおいてライブニッツ・ヴォルフの完全性の概念と対立するクルージウスの責務の概念、イギリス近代倫理學史上のホッブズ・マンドヴィルの利己

説とシャフツベリ・ハチソンの利他説を背景として、そこにルソーの影響が加わることで、カント倫理学がどのように成立を見るか論ぜられる。本書『カント倫理学の成立』で注目されるべき点は多々あるが、とりあえず次の四点を挙げておく。

第一に、イギリス道徳哲学とカントとの関係を立ち入って論ぜられたことである。たとえば補論では、にハチソンやアダム・スミスとカントとの比較研究が、当時イギリスで流行した「批評」や「批判」という語句を手がかりになされていく。この補論も含めて本書では、まだ主題的ではないが、利害関係のない「注視者」(spectator)というハチソンの概念や、「公平な注視者」というスミスの概念に注意を促されている。このような注意をされる濱田先生自身もまた、哲学の立場が「公平な注視者」の立場であると考へておられると言えよう。

第二に、イギリス道徳哲学におけるいわゆる利他説の場合に仁愛だけが強調されるばかりか、ハチソンに見るように、自愛心もまた仁愛と並んで行為の原理として認められることへの注意を促していることである。ここには、たんに利他説だけにではなく利己説にも人間の真実を見る濱田先生の姿勢が反映されていると思われるし、これはカントの人間観にも通ずると思われる。

第三に、カント倫理学の根幹をなす定言命法の成立史的

研究として、クルージウスの思想の影響についてドイツの先行研究に言及しつつ日本ではじめて論じられたことである。さらに本書の本文の最終章では、一七七〇年のカントの教授就任論文に「普遍意志の規則」による純粹道徳学の構想を読み取られていることも注目すべきである。

第四に、カントの『美と崇高との感情に関する観察』自家用本余白に断片的に書き残された『覚書』におけるカントの思想を、ラテン語の覚書も含めて詳細に分析されたことである。これらの研究は日本では初めのことであり、また当然のことであるが、カント倫理学の成立史のかつて秘められてきた部分を明らかにしている。そればかりか、従来の濱田先生の研究から見ると、カントの思想をイギリス道徳哲学やドイツ啓蒙思想やルソーの思想と比較する比較思想的な観点での研究がずっと詳細に為されている点が注目される。

他に『カント倫理学の成立』には入っていないカント研究も存在する。法政大学にご着任後の一九七四年に『文学部紀要』でカントの人格概念について論ぜられたものや、同年の日本倫理学会論集『人格』でホッブズとロックの人格概念について論ぜられた論文がある。また同年に雑誌『理想』で「カントにおける人間の自覚」という表題でカントの「根源的統覚」という概念について論ぜられている。一九七七年の日本倫理学会論集『良心』では「近代イギリス

における良心の概念」として、バトラーにまで論及されている点が新しい。一九七九年の日本倫理学会論集『自然』では「カントにおける自然概念」をカントの実践哲学の射程で論ぜられている。これらは七〇年代のものであり、カント哲学に内在的な研究を中心に、イギリスの倫理思想の研究もなされたと言える。

三 一九八〇年代を中心に（『カント哲学の諸相』期）

濱田先生の第三の研究書は『カント哲学の諸相』である。これは法政大学文学部ご退職後一年ほど経ってからまとめられ、一九九四年の十一月に出版された。本書は『カント倫理学の成立』以降の時期の論文から成っており、カバーされている領域はこれまでの研究書で取り上げられた批判期前のカントの思想から先へ進み、カントの一七七〇年代にかかわる『純粹理性批判』の成立史的研究、さらに主として『純粹理性批判』以降のカントの諸思想になる。

本書では第一章で、カントの生き方の特徴として、学究的性格、複数主義（プルラリスムス）の立場へ導くような開かれた心性、世界市民的性格の三点を挙げて論及されている。これら三点には濱田先生ご自身の立場も見取れるのではないかとと思われる。

その他では、批判期後のカント哲学を研究したものとし

ては、法廷としての『純粹理性批判』、「善意志」とは何かの研究、キケロの『義務論』との対比的研究、アダム・スミスの「注視者」概念と「実践理性」との比較研究、永遠平和論に関する二つの研究、最後に人間学に関する研究、という具合である。アダム・スミスとの対比研究は『カント倫理学の成立』の補論をさらに「公平な注視者」という論点に絞ってカントの「実践理性」との比較研究をされたと言える。また、人間学に関する研究ではアーレントを引き合いに出しながら、カントのエゴイズム論に複数主義の立場を読み取られる点が特徴的と思われる。

『カント哲学の諸相』のなかにキケロの『義務論』とカント倫理学との対比的研究があるように、濱田先生は西洋古代の倫理学に対しても丁寧な目配りをされる。たとえばゼミでは、カントの「Klugheit」の概念は選べばアリストテレスの「phronesis」に由来し、キケロがこれを「prudencia」とラテン語訳し、アダム・スミスでは英語の「prudence」となり、ドイツ語訳が「Klugheit」であると説明され、濱田先生はカントのこの語に「賢慮」や「思慮」という訳語を用いられて「Klugheit」のもつ積極的な面に着目されていた。

一九八〇年代後半にはカントの平和論についての論究が為され、雑誌『理想』での「カントの永久平和論」や法政平和大学での「カントの平和論」の講演が見られる。濱田先生は世界市民の注視者の性格の重要性を説かれ、カント

に見いだされる世界市民の立場は、国家から離れて宙に浮いたたんなる世界注視者ではなく、「国家市民の立場の徹底」によつて開かれる「国家の内部における国家を越える立場」であるとされる。

なお、『カント哲学の諸相』に収められていないが、一九八八年の日本倫理学会論集『倫理学とは何か』の論文「倫理学とは何か」では、ホッブズが「デカルトの倫理学再構築の企図」を継承し発展させたこととされ、カント倫理学における格律概念に「アリストテレスの実践知の継承」を見られる点などが特筆できる。

濱田先生は、日本思想では和辻哲郎への強い関心をお持ちであった。これは、大学での和辻哲郎による最後の二年間の講義に出席されたということもあり、また法政大学が和辻哲郎と浅からぬ縁を持っていたことにもよると思われる。和辻哲郎の生誕百年にあたる一九八九年に濱田先生は法政哲学会で講演され、これが翌年の『法政哲学学会報』の「和辻哲郎管見」となる。この「管見」では、思想の「源泉への遡行」という和辻の研究姿勢が注目される。これは濱田先生の研究姿勢にも通ずると思われる。また、長年のあいだ手つかずになっていた法政大学図書館の和辻哲郎文庫を整理され、一九九三年には『和辻哲郎の思想と学問に関する基礎的研究』（科研費研究成果報告書）をまとめられ、その中に「和辻哲郎の思想世界」を掲載されている。

四 最後の十年と全体を振り返って

『カント哲学の諸相』での研究は、一九九五年にカント協会のシンポジウムでなされた提題「カントと平和の問題」へと引き継がれ、さらに濱田先生は一九九九年の同協会シンポジウムでの提題「カントと現代文明」においてカントの歴史哲学について論及される。また日本思想に関しても、法政大学文学部ご退職の前後から和辻哲郎や三木清に言及される機会が多くなっており、一九九五年には三木清の郷里の龍野で「三木清の全体像」という講演をされた。その後も一九九九年に龍野に三木清研究会が発足した折には「市民的哲学者としての三木清」という講演をされ、さらに研究会の会長を務められ、二〇〇四年に亡くなられる二年前まで研究会の毎年の大会に参加されている。

なお、濱田先生は法政大学文学部の最終講義で「人間とは何か」というテーマで語られており、なかでもカントの説く「知恵に至るための三つの格律」を強調される。これは、その後に濱田先生が亡くなられる直前までカントの『人間学』の翻訳と詳細な「訳注」の作成に打ち込まれたことにつながる。残念ながら「訳注」の完成にまでは至らず公にされていないのであるが、この訳注にはカントの『人間学』にかかわる注意が様々な角度から加えられている。た

とえばカントと同時代のイギリス文学からカントが大きな影響を受けていることに注目され、夏目漱石の文学論を引き合いに出して解説されている箇所もある。ここには、濱田先生ご自身の人間への深い関心も重ね合わされていると思われる。

以上の全体を振り返ると、濱田先生のカント研究については、一九八一年の第二の研究書『カント倫理学の成立』に至るまでは主として批判期前のカント哲学を中心に成立史的研究をされ、その後は批判期のカント倫理学や政治哲学の方面に研究の中心を移されたと考えられる。その間に濱田先生のカント研究では最初から最後までイギリス思想への目配りがなされている。そこで、本発表の課題である濱田先生の思想形成という点で言えば、濱田先生の政治哲学や倫理学や人間学の思想は次のように特徴づけられるのではないだろうか。一九六七年の段階では批判期前のカントが行き着いた知恵の立場に立たれ、次の一九八一年の段階ではカントとスミスの比較研究の中で「公平なる注視者」という立場を重視され、その後のカントの批判期哲学を本格的に研究される段階から、とくにカントの政治思想や人間学における複数主義（プルラリスムス）的考え方を読み取られ、これをご自身の思想とされた、という三段階に整理することが可能であると思われる。もともと、以上の三つの立場は順次乗り換えられたというのではなく、先の

ものは後のものと並行して残っているし、後のものは先のものに萌芽的に含まれている、という性格の立場である。つまり、濱田先生のご研究で重点が置かれる立場のこのような変遷は、自己否定的な変化の過程ではなく、地層が積み重なっていくような重層的な過程であると言え、濱田先生はこの意味でまさに一九六二年に論ぜられた認識の「無限の深化拡大の過程」を地でいかれたことになるのではないだろうか。